

## 学びを「生きる力」につなげるために 活用できるパラリンピック教育



国際パラリンピック委員会教育委員会委員 マセソン 美季

### 学びを「生きる力」につなげるパラリンピック教育

私は、国際パラリンピック委員会（IPC）の教育委員会の委員として、国内外におけるパラリンピック教育の普及推進役を担っており、IPC公認教材『I'mPOSSIBLE（アイムポッシブル）』日本版の開発責任者でもある。既に千葉県内では、活発にパラリンピック教育を進めていただいているが、教材制作に込めた想いや、パラリンピック教育の可能性について改めてご紹介させていただく。

### 「自尊心」を高め、相互理解も深める教育

パラリンピック教育は、様々に解釈されるようだが、大会前の機運醸成だけを目的にしているわけではない。未来の社会を担う子供たちが、パラリンピックという題材を通して、自分たちの社会をより良くするように考えるきっかけを作り、興味関心、好奇心を引き出す工夫や、論理的思考力や問題解決能力を伸ばす要素を盛り込むことに注力したのが『I'mPOSSIBLE（アイムポッシブル）』日本版教材である。学校での学びが、社会を生き抜く力を育む主体的な学びの確立や、自他ともに尊重し、豊かな人間性を育む教育の推進につなげられる内容になっている。

### ImpossibleからI'mPOSSIBLEへ

パラリンピアンたちは、周りの人たちがImpossible（不可能）だと思えることでも、考え方を変えたり、少し工夫したりすれば、

I'mPOSSIBLE（「私は、できる」という意味の造語）に変えることができると教えてくれる。この価値観を、子供たちにも伝え、簡単に諦めず、「どうすればできるようになるか」を考える癖を身に付けてもらいたいというのも、パラリンピック教育に込めた願いである。

### 「共生社会」への学びを深める、パラリンピック教育の3つのステップ

IPCは、スポーツを通してインクルーシブな世界の実現を目指している。「インクルーシブ」という言葉は、「包摂」や「包み込む」という意味であり、インクルーシブな社会は、「共生社会」と翻訳されることも多い。

パラリンピックは、多様性を受け入れ、より多くのアスリート達が個性や能力を発揮し活躍できるよう、様々な工夫が凝らされた大会で、そこには、共生社会を具現化するためのヒントがちりばめられている。「公平」の概念を考えるための材料も満載である。

I'mPOSSIBLE日本版は、3つのステップで構成されていて、単にパラリンピックに関する知識を習得するだけの学習で終わらせず、共生社会の実現に向けた概念を育てることを念頭に、取り組んでいただきたい。



図 3つのステップ

## 車椅子で体育の教員を目指す過程で考えた「インクルーシブ」の意味

今から20年以上前のある朝、通学途中、青信号の横断歩道を通行中に、居眠り運転のダンプカーにはね飛ばされた。脊髄を損傷し、足は動かなくなり、車椅子での生活が始まった。当時、私は東京学芸大学で、体育の教員を目指していた。教員になるという夢を諦めるか、学科を変更しようかと考えた。古い校舎で、バリアだらけの環境に、そもそも復学ができるのか？という心配も頭をよぎった。

あの時の私は、復学という選択肢を与えてくださった先生たちと、「失ったものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ」というパラリンピックを象徴する言葉に支えられ、生きる目的を失わずにすんだ。

退院後は、バリアだらけの古いキャンパスに車椅子で復学した。障害のある学生の立場で、教育者を目指す過程は、インクルーシブな授業のあるべき姿を体当たりで模索する貴重な経験になった。車椅子で実技の単位を取得するために、公平なルールや、用具の工夫など、仲間たちと話し合い、考え抜いた。安全面の配慮は大切だけれど、車椅子を必要以上に意識して、過度な配慮をされるのは、居心地を悪くするだけだということも伝えていった。インクルーシブな教育は、単に障害のあるなしに関わらず、全ての学習者が同じ場所で授業を受けることを指すのではない。そして、既存の授業スタイルや学校の仕組みのまま、障害のある児童生徒を包み込むだけでは、本来目指しているインクルーシブな教育は実現できないことも体験してきた。

## 違いを価値と捉え、多様性に寛容になる力

これからの社会を生き抜く子供たちに求められているのは、知識を詰め込む教育ではな

く、意識や認識を変える教育ではないかと思う。そして、多様性に寛容になり、違いを価値と捉えられる感覚を醸成することではないだろうか。教員の私たちにできるのは、子供たちの柔軟な発想を引き出し、明るい未来を共に創る担い手を育てることである。パラリンピックを題材に共生社会について考える授業に関わった教員らの話をヒアリングしていくと、「教えていたつもりが、実は子供たちから教わることが多い。」という感想が多い。子供たちの発想は、教員のマインドも刺激し、耕してくれる。

## リバースエデュケーション（逆向きの学び）

往々にして、「教育」は、知識や技術などを伝授することを意味し、年長者から年少者へ、教師から子供への流れが想起される。パラリンピック教育では、子供から大人に向けた、逆向きの情報伝播が巻き起こることをご存知だろうか。学校で学んだことを、子供たちが家庭や地域の大人に伝え、パラリンピックから学んだ共生社会の考え方がコミュニティに浸透し、少しずつ社会の変革を促す原動力になっている。ごく自然な流れで、学校・家庭・地域が三位一体で連携・協働した教育活動の充実に繋がっていくのである。

## 2020年はパラリンピック教育元年

大会が終了しても、共生社会の実現に向けた取組は終わらない。2020年は、パラリンピック教育元年であり、大会の開催をきっかけに、少しずつより良い社会を作っていくための視点や考え方を醸成させていくのがこの教育の目指すところである。

教育の力で、社会を変えていくために先生方のお力添えをお願いしたい。